



●海の底で社交ダンス

—ヘコアユ—

ご存知の方も多いと思いますが、今研究所では阿嘉港のいけすにつり下げたかごの中でサンゴを育てています。去年生まれたサンゴたちおよそ4000 群体が、大きいものは直径 3~4cm に成長しました。今年のうちには海に移植できると楽しみにしています。このサンゴの飼育については、またいつか詳しくお話ししたいと思います。その観察や世話のために、ときどき港の海の中をのぞきます。すると、必ずといって良いほど見かけるのが、今回ご紹介するヘコアユです。

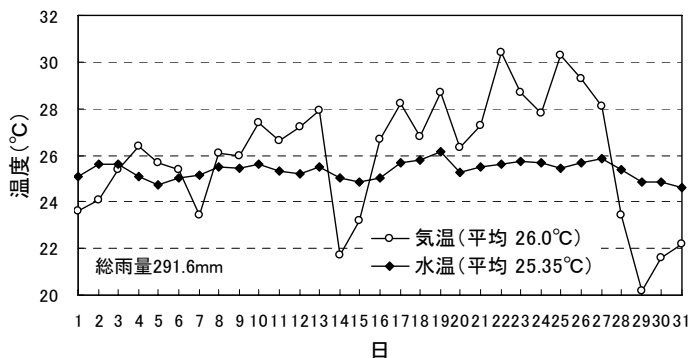
ヘコアユの特徴は、なんと言ってもその形と泳ぎ方でしょう。小さい口の伸びた体は、細長くとても薄くて、しかもエビの殻のような甲らでおおわれていて（そのために英語では“シュリンプ・フィッシュ”=エビのような魚と呼ばれます）、体を曲げることができません。ほかの多くの魚たちは体を左右に曲げながら尾びれを大きくゆらして水をかいて泳ぎますが、ヘコアユはそれができないので、主にはヒレだけを使って泳ぎます。そしてその泳ぎ方も、ふつうの魚のように頭と尾を水平にした姿ではなく、頭を下に尾を上にして、まるで逆立ちしているような格好で泳いでいるのです。調べてみると、どうやらヘコアユという名

前も、“逆さ”という意味の「へこ」と「歩む（あゆむ）」（=逆さになって移動する）からきているようです。阿嘉島の海でもそうですが、ヘコアユは時には数十匹にもなる群れを作って、海の底を逆立ちで泳ぎ回っています。群れすべてのヘコアユが同時に横を向いたり、方向を変えたり、個体同士が位置を変えながらも群れとしては一体となって移動していく様子は、時に華麗さを感じさせます。

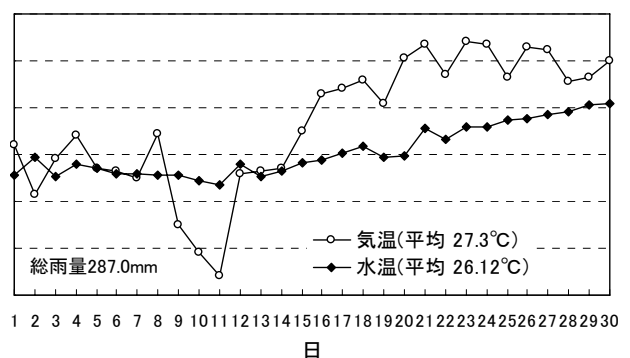
なぜヘコアユは、こんな姿・こんな泳ぎ方なのでしょうか。もしかしたら、ヘコアユの暮らし方と関係しているのかもしれませんが、ヘコアユは、その小さな口で小型の動物プランクトンなどを食べて暮らしています。海底付近には時々動物プランクトンの集まりができていて、ヘコアユの群れは、どうやらそれをねらって動き回りながら、餌をとっているようです。そうした動物プランクトンはそんなに早く泳ぎ去らないので、ひれを使うだけのヘコアユの泳ぎでも十分捕まえることができるので（ただし、ヘコアユが餌をとる最終段階では、すばやい口の動きが見られます）。では、ヘコアユが敵におそわれたらどうなるのでしょうか。まだ敵との距離があって「警戒態勢」の段階では、逆立ちのまま遠ざかろうとしますが、もっと危険がせまると、逆立ち状態では早く泳ぐのに水の抵抗が大きいのでしょうか、頭を先にしてやや斜めに、もっとあわてたときにはほとんど真横になって（つまりふつうの魚と同じように）逃げていきます。このとき役に立つのは体の薄さ（厚みのなさ）です。それまで、わりと幅の広い体側を見せていたヘコアユが、ぐるりと体の向きを 90 度変えて腹側や背側を見せると、とても薄くて線のように見つけづらく、見つけても魚のようには見えません。

定点観測

2006年 5月



2006年 6月



また、ヘコアユの体形は、すき間にもぐりこむのにも好都合で、特に良い隠れ家は、ガンガゼのとげの間です。実際の海の中では、いつもウニの中やそばにいるわけではありませんが、時々ガンガゼに入っているヘコアユが観察されます。以前紹介したように（アムスルだより No. 43）ガンガゼのとげは毒をもった強力な武器ですから、そこに逃げこめば、多くの天敵はあきらめてくれるでしょう。ヘコアユは、そのとげのすき間に入りやすいような薄くて細い体つきをしていて、そしてさらに、ヘコアユの体の横には口から尾にかけて1本の黒い線が走っていて、これがガンガゼのとげと似ているので、ガンガゼの中に入り込んだヘコアユの姿は、まわりのとげの列に溶け込んでしまうのです。

このようにヘコアユの姿は、忍者のように敵の目をごまかすのに適したもののようです。すばしく泳ぎ回れないから身を隠しやすい姿になったのか、それとも上手に身を隠せるからすばやく泳げなくても良くなったのか、どちらが先かわかりませんが、ワルツを踊っているようなヘコアユの群れの動きは、穏やかな海のユニークで優雅な景観の一つです。

●阿嘉島の海より

「サンゴの産卵観察会」

阿嘉小学校 5年 喜屋武 歩美

6月12日～6月17日まで、私たち阿嘉小学校3年生から6年生は6時から家にはいなくてはいけませんでした。なぜかというと、サンゴの産卵観察会があるからです。

6月12日、家の電話が鳴りました。「今日は

産卵観察会はありません」そういう伝言が6日間続きました。6月17日、とうとう最後の日がやってきました。「今日、あります」と言われました。とてもうれしかったです。

私は急いで準備をして、真謝ビーチへ行きました。すると、ほとんどの人たちが集まっていました。比嘉先生の「集合」の合図でみんな並びました。出席点検をした後、自分達で決めたきまりをみんなで読み上げました。そして、班ごとに並び、各班のダイバーさんの話を聞いて待ちました。

海にいる他の班のダイバーさんが、懐中電灯で照らして合図をしました。私たちの班も急いで海に入り自分達のブイまで泳いでいきました。5,6分待っていると、私たちの班が見ているサンゴも丸っこくて小さな卵を産み始めました。はじめは少しずつ出てきました。そしてドンドン出てきました。しばらくすると、海一面が卵でいっぱいになりました。とてもきれいでした。今年は去年より多く産まれたのでとてもすごかったです。また来年もぜひ見たいです。

去年に比べて今年は、気温、水温とも高く、寒い思いをしませんでした。また、波も静かで水深も浅く、シュノーケルで見るとは最高の条件でした。でも、一番私たちが安心してこのサンゴの産卵観察会ができたのは島の多くの方々の協力があったからです。世界でもこのような体験ができるのは私たちの学校ぐらいだと聞きました。ありがとうございます。

そして、私たちがこの恵まれた環境を守り、未来のこの島を今よりももっときれいな島にしていきたいと思います。そして、もっと多くの人たちに見てもらいたいと思いました。